

多層指導モデルMIM 活用事例

掛川市立中央小学校 三輪直司校長先生 田中和彦先生



掛川市立中央小学校では、数年前から入学当初の1年生や特別支援学級、発達通級指導に「多層指導モデルMIM（ミム）」（以下、MIM）を採り入れ、子ども一人一人の言語能力を高めるために、指導や支援に活用してきました。

とくに、読みにつまずきが見られる子どもは、ドリルやテストなどで、問題文の読解に困難さをかかえることもあるため、それぞれの子どものつまずきの特性を把握し、個別に支援していくためにMIMを活用しています。

今回は三輪校長と特別支援学級をご担当の田中先生に、MIMの具体的な活用方法と、今後の展望についてお話を伺いました。

活用シーン

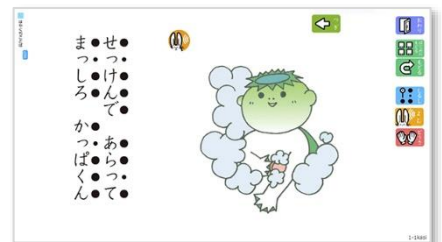
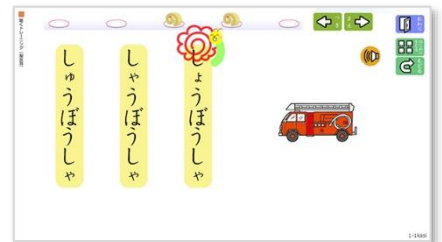
◆これまで中央小学校では、新入生の教室に発達通級指導教室担当が出向き、MIMの指導法である「視覚化」「動作化」を中心に全体指導を行い、その後は毎日の給食のメニューを利用して、みんなで読みの「動作化」に挑戦してみる、といった方法で、学級担任が日常的に指導してきました。

◆特別支援学級でも同じように、MIMを使った指導を実践してきましたが、同学年の児童でも、個々の課題が異なることから、個別対応の必要性を強く感じていました。そこで本年度、1人1台端末が整備されたタイミングで、MIMのデジタル版を導入し、より子ども一人一人に合った、個別対応が可能になりました。

◆現在は、読みが苦手な子どもに、MIMの指導法の実践とMIMデジタル版のさまざまなトレーニングなどを活用しながら、音と言葉を結びつける学習を中心に活用しています。ゲーム感覚で楽しみながら学ぶことができ、苦手な文章の読み取りにも意欲をもてるようになってきています。（田中先生）

MIMの指導法とは

MIMには「動作化・視覚化によるルールの特化」や「日常的に使う語彙の拡大」といった指導原則があります。給食のメニューを「動作化」しながら読むことも、MIMの指導法を使った工夫のひとつです。



▲楽しみながら取り組めるMIMデジタル版の画面

今後の展望

つまずきが顕在化する前に支援する



▲お話を伺った、三輪直司校長（右）と田中和彦先生（左）

◆現在は、つまずきが顕在化している子どもへの支援として、MIMを使った指導を実施していますが、将来的には、つまずきが顕在化する前の子どもにも支援の幅を広げていく、「予防的支援」を進めていきたいと考えています。

◆さらに、MIMのアセスメントテストの結果を活用して、どんどん先に進める子どもは教科学習教材の通常のドリルに挑戦、つまずきが見られる子どもはMIMを活用した支援をするという、本当の意味での児童の特性に合わせた、最適な個別学習を実現させたいと考えています。

◆そのためには、指導者側の環境整備も必要です。本校では、学校グループウェアである「ミライム」等を活用しながら、指導者間でのスムーズな情報共有につなげていく予定です。（三輪校長）

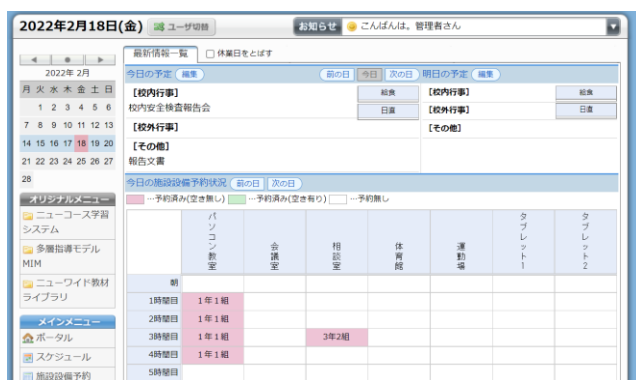
MIM×ミライムでよりよいICT学習を推進する

◆ミライムは、グループウェアの中でも、学校向けの専用製品であり、シンプルな画面構成と操作性が特長です。

◆さらに、勤怠の管理が行えるため、先生方が毎日必ず目にします。

毎日必ず見るからこそ、大事な情報の共有を学校全体で行うことができる利点があります。

◆学校全体で取り組むことが望ましいアセスメントという分野をグループウェア上から簡単に確認できることで、推進の一助となっています。



▲ミライムのTOP画面。TOP画面の配置や各ソフトウェアへのリンクも学校様でカスタマイズ可能です。※アセスメント結果の共有等、活用促進の一助として（リンク機能を）利用いただく予定です。